



説教要旨「死するための誕生」

イザヤ書7章10～14節

マタイによる福音書1章18－23節

イエス様の時代、ユダヤ人の間にはいつかユダヤ人に独立と繁栄を取り戻してくれるメシア（救い主）が、ダビデの子孫から出るという期待が、広まっていました。マタイによる福音書は、イエス様の誕生物語を旧約聖書の英雄たちと重ねて描くことで、イエス様がこのメシア待望に応える者だと示そうとしました。しかしイエス様は、ユダヤ人が待ち望んでいた通りのメシアではありませんでした。

ユダヤ人の多くが期待していた、ユダヤ人の独立を勝ち取る、政治的な強い指導者ではなく、むしろ、当時のユダヤ教の教えに反抗してでも、ひたすら人を愛し、ひたすら人を癒し、ひたすら人に罪からの赦しを宣言して歩いたのです。イエス様はローマの支配からユダヤ民族を解放するメシアではありませんでしたが、彼に直接ふれた人びとの中に、消す事のできない喜びと感謝を残しました。にも関わらず、イエス様が捕らえられて命を奪われるとき、彼に愛された人びとは彼を見捨てて逃げ出し、イエス様は孤独に、これ以上ないというほどの苦痛と恥を味わい尽くして死んでいったのです。彼を慕いながら彼を見捨てた人びとは、その罪意識に苦しみました。

キリスト教の出発点は、イエス様がどうして死ななければならなかったのかという疑問から始まったと断言していいでしょう。

そして、私たちがクリスマスに読むイエス様の誕生の物語もまた、イエス様の死と分ちがたく結びつけられています。ルカによる福音書によれば、イエス様は生まれた時も、死んだ時も、布にくるまれて、石の上に寝かされ、ヨセフという名の男性とマリアという女性に見守られているのです。イエス様はその誕生の場面において、すでに彼が多くの人のために死ぬことが運命づけられていたのだということが示されているのです。

イエス・キリストは死ぬ為にこの地上に生まれたのです。彼は私たちの抱える、全ての罪を贖うために、私たちの身代わりとして死ぬためにやって来られたのです。

(2020・12・20 説教者：稲垣真実)